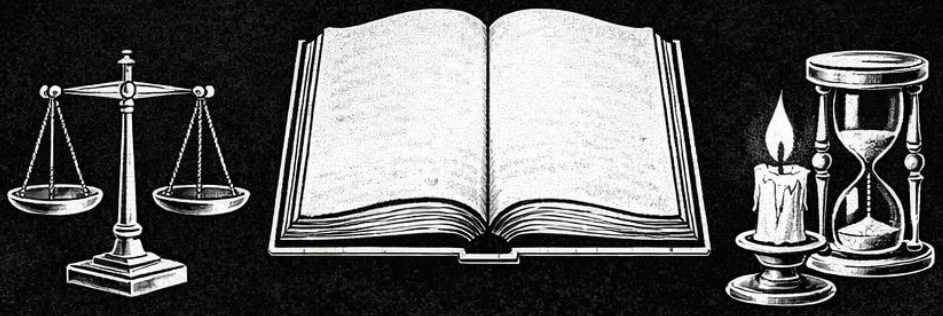
英文解訳の掟



THE RULES OF ENGLISH INTERPRETATION

はじめに

本書の目的は、英文解釈を「感覚」や「経験」に依存したものから、「再現可能な技術」へと引き上げることにある。多くの学習者は、語彙の意味を手がかりに英文を理解しようとする。しかし、その方法は、平易な英文には一定の効果をもつとしても、構造が複雑になった途端に不安定になりやすい。文が長くなり、修飾関係が重層化し、節や句が入り組むようになると、単語の意味を順に追うだけでは、文全体の骨格を正確に捉えることが難しくなるからである。英語は、語の意味の総和によってではなく、語順と構造によって意味が組み立てられる言語である。したがって、英文解釈において最優先すべきは、個々の語の意味ではなく、文全体の構造である。

本書では、英文を読み解くための判断基準を「掟」という形で体系化し、品詞判定・文型把握・修飾関係の認識・スラッシュによる構造の可視化といった技術を、段階的かつ相互関連的に整理する。ここでいう「掟」とは、単なる暗記事項の集積ではない。むしろ、英文を読む際に「何を先に見て、何を根拠として、どのような順序で判断するか」を明確にするための、実践的な認識の枠組みである。したがって、本書が目指すのは、知識を断片的に蓄積することではなく、個々の知識を有機的に結びつけ、再利用可能な判断体系として定着させることである。

英文解釈は、しばしば才能や勘に左右される営みのように考えられがちである。しかし、本来それは、一定の原則に従って習得可能な技術である。技術である以上、適切な方法に基づいて訓練すれば、だれでも着実に身につけることができる。また、技術として整理されたルールは、特定の一題にしか通用しない知識ではなく、未知の英文にも適用できるという点で、高い汎用性をもつ。本書は、そのような普遍的で再現可能な読解技術の基盤を提供することを目的とする。

・本書の使い方

本書は、各章に配置された「掟」を中心に読み進める構成になっている。各掟は、英文を読む際の判断基準を簡潔に示したものであり、その後に続く解説によって、具体的な運用方法と注意点が示されている。学習にあたっては、まず掟そのものを理解し、その意図を正確に把握したうえで、例文を通して適用の仕方を確認することが重要である。特に重要なのは、「意味から入らない」という姿勢である。英文を読む際には、まず語形・位置・働きといった構造的手がかりをもとに骨格を確定し、その後に意味を整えるという順序を徹底する必要がある。この順序を守ることで、未知語が含まれていても文全体の構造を安定して把握できる。

さらに、本書の内容は、それ自体で完結するものではない。各掟を理解した後は、実際の英文に触れる量を増やし、多読を通して運用力を高めることが不可欠である。ルールによって精読の精度を確立し、そのうえで多読によって処理速度を高める。この二段階の学習によって、精読と速読の双方を統合した実践的読解力の獲得を目指すことが、本書の基本的な使用方針である。

・英文解釈に必要な 3 つの視点（語形・位置・働き）

英文解釈において最も重要なのは、語の意味ではなく、その語が文中でどのような役割を果たしているかを見抜くことである。本書では、そのための基本的視点として、「語形」「位置」「働き」の三つを提示する。

第一に「語形」である。語形とは、接尾辞や語尾、語の構成要素といった形態的特徴を指す。たとえば、-tion や -ment は名詞、-ous や -able は形容詞、-ize や -ify は動詞を作る傾向がある。このような語形の知識は、未知語に対しても品詞の見当をつけるための有力な手がかりとなる。

第二に「位置」である。語が主語・目的語・補語・修飾語のどの位置に置かれているかによって、その品詞や機能は大きく制約される。たとえば、主語や目的語の位置には名詞要素が入りやすく、補語の位置には名詞または形容詞が現れる。このように、位置は品詞判断の重要な基準となる。

第三に「働き」である。働きとは、その語が何を修飾し、どのような意味関係を形成しているかという機能的側面である。形容詞は名詞を修飾し、副詞は動詞・形容詞・文全体を修飾する。このような修飾関係を正確に把握することで、文の構造は明確になる。

これら三つの視点は、互いに独立したものではなく、常に相互に補完し合う関係にある。語形で仮説を立て、位置で絞り込み、働きで確定する。このプロセスを徹底することで、品詞判定と構造把握の精度は大きく向上する。

英文解釈は、直感ではなく、こうした視点に基づく体系的な判断の積み重ねによって成立する。本書の掟は、その判断を支えるための実践的な枠組みである。

CONTENTS

第１章　　品詞判定の原則.....8
1　品詞は、語形・位置・働きから判断する.....8
掟 1-0　意味で決めるな。語形・位置・働きで決めよ。.....8
2　語形から見抜く.....8
掟 1-1　品詞に迷ったら、まず語尾を見よ。.....8
掟 1-2　ly を見たら、副詞と決めるな。何に付くかを見よ。.....8
掟 1-3　- ing と -ed は、形でなく使い方で決まる。.....9
3　位置から見抜く.....9
掟 1-4　主語・目的語の位置なら、まず名詞を疑え。.....9
掟 1-5　補語の位置なら、名詞か形容詞を疑え。.....10
4　修飾関係から見抜く.....10
掟 1-6　形容詞がかかれば、まず名詞を見よ。.....10
掟 1-7　副詞がかかれば、まず動詞を疑え。.....10
5　後続要素と骨格から見抜く.....11
掟 1-8　名詞が続けば前置詞、SV が続けば接続詞。.....11
掟 1-9　なくても文が立つなら、まず副詞を疑え。.....11
第２章　　品詞編Ⅰ　名詞.....12
1　2-1　名詞総論.....12
掟 2-1　名詞は、文中で五つの働きをする。.....12
掟 2-1a　名詞は主語になる。.....12
掟 2-1b　名詞は目的語になる。.....12
掟 2-1c　名詞は補語になる。.....13
掟 2-1d　名詞は同格になる。.....13
掟 2-1e　名詞は意味上の主語になる。.....14
掟 2-1f　浮いた名詞は、まず目的語と思え。.....14
第３章　　品詞編Ⅱ　形容詞.....14
2　2-2　形容詞総論.....14
掟 2-2　形容詞は、文中で四つの働きをする。.....15
掟 2-2a　形容詞は名詞を修飾する。.....15
掟 2-2b　形容詞は補語になる。.....15
掟 2-2d　the＋形容詞で名詞扱い。.....16
掟 2-2e　浮いた形容詞は、まず目的格補語と思え。.....16
第４章　　品詞編Ⅲ　副詞.....18
1　2-3　副詞総論.....18
掟 2-3　副詞は、動詞・形容詞・副詞・文全体を修飾する。.....18
掟 2-3a　副詞は動詞を修飾する。.....18

掟 2-3b 副詞は形容詞を修飾する。.....18
掟 2-3c 副詞は副詞を修飾する。.....19
掟 2-3d 副詞は文全体を修飾する。.....19
掟 2-3e なくても文型が成立するものは、まず副詞を疑う。.....20
掟 2-3f 動詞句の内部に入る語は、副詞であることが多い。.....20
掟 2-3g 文頭の副詞は、文全体にかかることが多い。.....20
掟 2-3h 文修飾副詞は、位置によって意味のかかり方が変わる。.....21
第 5 章 品詞編Ⅳ 動詞.....22
1 2-4 動詞総論.....22
掟 2-4 動詞は、文の骨格を作る中心である。.....22
掟 2-4a 動詞は自動詞にも他動詞にもなる。.....22
掟 2-4b 動詞が文型を決める。.....22
掟 2-4c 動詞を見たら、まず「何を取るか」を考える。.....23
2 2 文型ごとの動詞.....23
掟 2-4d 一般動詞の第 1 文型は、存在・移動を表すことが多い。.....23
掟 2-4e 第 2 文型は、「～になる」「～の状態である」を表すことが多い。.....24
掟 2-4f be 動詞は、主語と補語を結ぶ。.....24
掟 2-4g 一般動詞の後ろでは、まず目的語を疑う。.....24
掟 2-4h SVOO なら、give 系か take 系を疑う。.....25
掟 2-4i SVOC なら、make 系・think 系・call 系・put 系を疑う。.....25
3 3 語形・接頭辞・語順.....25
掟 2-4j 文字数の多い動詞は、まず他動詞を疑う。.....25
掟 2-4k 動詞の接頭辞に注目する。.....26
掟 2-4l impose A on B 型は、impose on B A の語順になることがある。.....26
4 4 意味と構文.....27
掟 2-4m 中学レベルの動詞は、文型ごとに意味を覚える。.....27
掟 2-4n 「奪う」意味の動詞は、take 系か rob 系かを見分ける。.....27
掟 2-4o 意味が似ている動詞は、使い方も同じであることが多い。.....27
掟 2-4p 文型で意味が決まる。.....28
掟 2-4q remind 型の動詞は、受動態で使われることが多い。.....28
第 6 章 第 3 章 スラッシュの原則.....29
掟 3-0 語数で切るな。まとまりで切れ。.....29
掟 3-1 主節の前に長い要素があれば、主節の直前で切れ。.....29
掟 3-2 長い主語を見たら、主語の終わりで切れ。.....29
掟 3-3 長い目的語を見たら、その終わりで切れ。そこで骨格が見える。.....30
掟 3-4 前置詞を見たら切れ。だが、名詞に強くかかるなら、まとめて抱えよ。.....30
掟 3-5 to 不定詞を見たら、前と混ぜるな。ひとかたまりで取れ。.....31
掟 3-6 長い名詞要素が二つ続いたら、その境目で切れ。文型の変化を疑え。.....31

掟 3-7　前置詞のついていない、名詞または冠詞・所有格・数詞などの前で切れ。 32
掟 3-8　目的語の後に形容詞が来たら、その前で切れ。 32
掟 3-9　動詞が二つ見えたら、その境目で切れ。 33
掟 3-10　接続詞を見たら、その前で切れ。そこから新しい流れが始まる。 33
掟 3-11　関係詞を見たら、その前で切れ。後ろは前の名詞の説明である。 34
掟 3-12　カンマを見たら、その前で切れ。 34
掟 3-13　カンマで挟まれたら、ダブルスラッシュで囲め。そこは挿入である。 35
掟 3-14　コロン、セミコロンを見たら、その前で切れ。 35
掟 3-15　ダッシュを見たら、その前で切れ。 36

第1章 品詞判定の原則

1　品詞は、語形・位置・働きから判断する

掟 1-0　意味で決めるな。語形・位置・働きで決めよ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

英文解釈では、単語の意味だけで品詞を決めてはいけません。品詞は、語形・位置・働きの三つから判断するのが基本です。語形とは、接尾辞や語尾など、その語の形そのものです。位置とは、その語が主語・目的語・補語・修飾語など、文のどこに置かれているかということです。働きとは、その語が何を修飾し、どのような役割を果たしているかということです。たとえば、-tion なら名詞、-ous なら形容詞、-ize なら動詞の可能性が高いと判断できますし、主語・目的語の位置なら名詞要素、補語の位置なら名詞か形容詞をまず疑います。また、形容詞が修飾していれば名詞、副詞が修飾していればまず動詞を疑う、という判断も重要です。さらに、後ろに名詞要素が来れば前置詞、SV が来れば接続詞、なくても文型が成立するならまず副詞を疑う、というように、後続要素や文の骨格からも品詞は見抜けます。つまり、品詞判定とは暗記ではなく、構造の中で行う判断です。この章では、そのための原則を順に確認していきます。

2　語形から見抜く

掟 1-1　品詞に迷ったら、まず語尾を見よ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

品詞を判断するときは、まず接尾辞に注目してください。英語では、単語の品詞はかなりの割合まで接尾辞から見当をつけることができます。とくに抽象名詞や形容詞、動詞の派生語が多く使われる英文では、この方法が非常に有効です。たとえば、-tion, -ment, -ness, -ity, -er は名詞、-ous, -able, -al は形容詞、-ize, -ify, -en は動詞を作ることが多い語尾です。意味が分からない語でも、まず接尾辞を確認すれば、その語が文の中でどの位置に入りやすいか、かなり見えてきます。英文解釈では、語彙知識が不足していても、構造を先に押さえることが重要です。そのための第一歩が接尾辞の確認です。ただし、接尾辞だけで機械的に品詞を決めるのではなく、最終的には文中での位置や働きと照合しなければなりません。接尾辞はあくまで最初の仮説を立てるための手がかりです。その仮説を、文構造の中で確かめることで、品詞判断の精度は大きく高まります。

掟 1-2　ly を見たら、副詞と決めるな。何に付くかを見よ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

-ly を見たときに、すぐに副詞だと決めつけてはいけません。重要なのは、その -ly が何に付いているかを確認することです。形容詞に付いて副詞を作る場合が多く、quickly, carefully, slowly などが典型例です。しかし、名詞に付いて形容詞を作る場合もあり、friendly, costly, scholarly, lively などはすべて形容詞です。この

ように、-ly は単純な「副詞語尾」ではなく、語形成の一部として働いています。したがって、-ly を見たときは、「副詞かどうか」を判断する前に、「この語は何を修飾しているか」「文中のどの位置にあるか」を確認してください。たとえば a friendly man の friendly は man を修飾しているので形容詞ですし、He spoke kindly to her. の kindly は動詞 spoke を修飾しているので副詞です。英文解釈では、語尾の知識だけで判断を終わらせず、必ず構造の中で確認する習慣を持つことが重要です。この一点を意識するだけで、-ly に関する誤判断は大きく減ります。

掟 1-3 - ing と -ed は、形でなく使い方で決まる。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

-ing や -ed は、形だけで品詞を決めてはいけません。これらは文中での使い方によって、まったく異なる役割を果たします。たとえば Swimming is good exercise. の Swimming は主語なので動名詞です。一方、I saw a boy swimming in the river. の swimming は a boy の動作を表す目的格補語です。また、a sleeping baby の sleeping は名詞を修飾する現在分詞です。同様に、-ed も She visited Kyoto. では過去形、She has visited Kyoto. では過去分詞、a broken window では形容詞的に使われる過去分詞です。このように、-ing と -ed は「形」ではなく、「位置」と「働き」で判断する必要があります。英文解釈では、主語の位置にあれば名詞、名詞の前後にあれば修飾語、目的語の後ろにあれば補語、といったように、文の構造の中で判断することが重要です。見た目に引きずられず、必ず文の中での役割を確認してください。

---

3 位置から見抜く

掟 1-4 主語・目的語の位置なら、まず名詞を疑え。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

文中で主語や目的語の位置にあるものは、まず名詞要素を疑ってください。英文では、主語にも目的語にも、名詞そのものだけでなく、名詞の働きをする語句が入ります。具体的には、名詞・代名詞に加えて、動名詞、不定詞の名詞的用法、名詞節などが含まれます。たとえば To study English is important. では To study English が主語、I enjoy reading books. では reading books が目的語です。また、That he passed the exam is surprising. のように、that 節が主語になることもあります。このように、主語や目的語の位置にあるものは、「意味」ではなく「位置」によって名詞的働きをしていると判断できます。英文解釈では、この「位置による判断」が非常に重要です。語の意味が分からなくても、主語や目的語の位置にあると分かれば、名詞要素として扱うことができます。この判断ができると、文型の把握が一気に安定します。意味に迷ったら、まず位置を見る習慣をつけてください。

掟 1-5　補語の位置なら、名詞か形容詞を疑え。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

補語の位置にある語は、まず名詞か形容詞を疑ってください。補語とは、主語や目的語の内容・状態を説明する位置にある語です。たとえば He is a teacher. では a teacher が主語 He を説明する名詞補語ですし、She looks happy. では happy が主語の状態を表す形容詞補語です。また、They elected him captain. では captain が目的語 him の内容を説明する目的格補語です。このように、補語は「説明する」役割を持つため、名詞または形容詞であることが基本です。英文解釈では、この補語感覚が非常に重要です。とくに、第 2 文型や第 5 文型では、補語を見抜けるかどうかが文構造理解の鍵になります。したがって、補語の位置にある語を見たら、「これは何を説明しているのか」「主語か目的語と同一関係にあるか」を確認してください。この視点を持つことで、文型の誤判断を大きく減らすことができます。補語は目立たないようでいて、構造の核心です。

4　修飾関係から見抜く

掟 1-6　形容詞がかかれば、まず名詞を見よ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

形容詞がかかっている語は、まず名詞を疑ってください。形容詞の基本的な役割は、名詞を修飾することだからです。たとえば a beautiful flower では beautiful が flower を修飾しているので、flower は名詞ですし、an important problem でも important が problem を修飾しているので、problem は名詞です。このように、「前から修飾されている語は何か」と見たとき、その被修飾語はまず名詞であると考えるのが有効です。もちろん、形容詞は補語としても使われますが、修飾関係に注目する場面では、この原則が非常に強力に働きます。英文解釈では、語の意味が分からなくても、修飾関係から品詞を推定できます。したがって、形容詞がどこにかかっているかを丁寧に確認し、その対象を見抜くことが重要です。この視点を持つことで、名詞句のまとまりも自然に把握できるようになります。修飾の向きを見ることは、品詞判断の近道です。

掟 1-7　副詞がかかれば、まず動詞を疑え。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

副詞がかかっている語は、まず動詞を疑ってください。副詞は動詞を修飾することが最も多いからです。たとえば run quickly では quickly が run を修飾しているので、run は動詞ですし、He slowly opened the door. では slowly が opened を修飾しています。ただし、副詞は形容詞や副詞、さらには文全体を修飾することもあります。very useful の very は形容詞 useful を修飾し、quite slowly の quite は副詞 slowly を修飾しています。このように、副詞は修飾範囲が広い語です。したが

って、「まず動詞を疑う」というのは出発点であり、その後に実際の修飾関係を確認する必要があります。英文解釈では、副詞がどこにかかっているかを見抜くことで、文の構造をより正確に理解できます。修飾関係を丁寧に追うことが、精密な読解につながります。副詞を見たら、意味より先に「どこにかかるか」を考えてください。

5　後続要素と骨格から見抜く

掟 1-8　名詞が続けば前置詞、SV が続けば接続詞。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

前置詞と接続詞の区別は、単語そのものではなく、必ず後ろの構造を見て判断してください。後ろに名詞要素が来ていれば前置詞、SV が来ていれば接続詞です。たとえば after dinner の after は後ろに名詞 dinner があるので前置詞です。一方、After he finished dinner, he went out. の after は後ろに he finished という主語と動詞があるので接続詞です。同様に before school と before he went to school、because of the rain と because it rained も同じ基準で区別できます。この判断は非常に重要で、接続詞と前置詞を誤ると、文の構造そのものを取り違えてしまいます。英文解釈では、単語の意味に頼るのではなく、「後ろに何が続いているか」を確認する習慣を持ってください。後続要素を見ることで、品詞と構造の両方が同時に明確になります。単語単独ではなく、必ず後ろまで読んで判断することが大切です。

掟 1-9　なくても文が立つなら、まず副詞を疑え。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

文の骨格を見たときに、なくても S・V・O・C の文型が成立する要素は、まず副詞を疑ってください。たとえば He quickly finished his homework. では quickly を除いても He finished his homework. で文は成立します。She came here yesterday. でも、here や yesterday を除いても She came. で骨格は成り立ちます。このように、文型成立に不要な要素は、副詞であることが非常に多いのです。また、He has never known such kindness. の never や、She may really understand the problem. の really のように、動詞句の内部に入り込む語も副詞であることが多いです。ただし、同格や挿入句など例外もあるため、「すべて副詞」と決めつけるのではなく、「まず副詞を疑う」という姿勢が重要です。英文解釈では、骨格と修飾を分けることが基本です。そのための最も有効な判断基準が、この原則です。不要に見える語を、まず副詞候補として処理する習慣をつけてください。

第2章　　品詞編Ⅰ　名詞

1　2-1 名詞総論

掟 2-1 名詞は、文中で五つの働きをする。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

名詞を理解するときは、「名詞は何を表すか」だけでなく、「文中でどのような働きをするか」を整理して押さえることが大切です。英文中で名詞が担う中心的な役割は、主に五つあります。すなわち、主語、目的語、補語、同格、意味上の主語です。この五つを押さえておくと、名詞を単なる語彙としてではなく、文の骨格を支える要素として理解できるようになります。たとえば、主語として文の出発点になり、目的語として動詞の影響を受け、補語として主語や目的語の内容を説明します。また、同格として前の名詞の内容を言いかえたり、動名詞や分詞構文において意味上の主語になったりすることもあります。英文解釈では、「その語が名詞かどうか」を見るだけでは不十分で、「この文でどの役割を果たしているか」まで見抜くことが必要です。名詞の働きを位置と構造の中で捉えられるようになると、文型の理解が安定し、長い英文でも骨格がぶれにくくなります。名詞は、文の中で最も基本的でありながら、最も多面的な働きをする品詞です。

掟 2-1a 名詞は主語になる。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

名詞の最も基本的な働きの一つは、主語になることです。主語とは、その文が「何について述べているか」を示す中心の語であり、文の出発点になる要素です。Tom plays tennis. では Tom が主語ですし、The train arrived late. では The train が主語です。英文を読むときは、まず「何が主語なのか」を見抜くことが大切ですが、その位置には名詞や名詞要素が来ると考えるのが基本です。たとえば To study English is important. では不定詞句が、That he passed the exam is surprising. では名詞節が主語になっています。このように、主語の位置にあるものは、意味だけでなく構造上「名詞の働き」をしていると判断できます。英文解釈では、主語を正確につかめるようになると、文全体の骨格が一気に見えやすくなります。どの語が主語かを誤ると、その後ろの動詞や補語の読み方まで崩れてしまいます。したがって、名詞が主語として働くという事実は、文構造理解の最初の土台だと考えてください。

掟 2-1b 名詞は目的語になる。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

名詞は、動詞の目的語にもなります。目的語とは、動作の対象となる語であり、「何を」「だれを」に当たる要素です。I like music. では music が目的語ですし、She bought a new bag. では a new bag が目的語です。他動詞の後ろに来る語は、まず目的語、つまり名詞要素を疑うのが基本です。たとえば I enjoy reading books.

では reading books が動名詞句として目的語になっていますし、He said that he was tired. では that 節が内容を表す目的語になっています。このように、目的語の位置には、名詞そのものだけでなく、名詞的な働きをする語句も置かれます。英文解釈では、「この動詞は何を目的語に取っているのか」を確認することで、動詞の意味もかなり明確になります。逆に、目的語を見誤ると、第 3 文型・第 4 文型・第 5 文型の判定が不安定になります。したがって、目的語としての名詞を見抜くことは、動詞の理解と文型把握の両方に関わる、非常に重要な作業です。

掟 2-1c　名詞は補語になる。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

名詞は補語になることもあります。補語とは、主語や目的語の内容を説明する語であり、単なる追加情報ではなく、その要素の中身を言い表す働きをします。He is a teacher. では a teacher が主語 He を説明する名詞補語ですし、They elected him captain. では captain が目的語 him の内容を説明する目的格補語です。ここでは、名詞がただ置かれているのではなく、前の名詞の内容を言いかえるように働いています。英文解釈では、この補語の感覚が非常に大切です。補語を目的語と取り違えると、文型そのものを誤ってしまうことがあるからです。たとえば They elected him captain. を「彼に captain を選んだ」と読んでしまうと意味が崩れます。正しくは「彼を captain に選んだ」です。このように、補語は前の語を説明している、という意識を持つことが重要です。名詞は主語や目的語になるだけでなく、他の名詞要素の内容を定義する役割も担います。この視点を持つと、第 2 文型と第 5 文型の理解がぐっと安定します。

掟 2-1d　名詞は同格になる。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

名詞は同格になることもあります。同格とは、前にある名詞の内容を、別の名詞で言いかえる形です。We visited Kyoto, the old capital of Japan. では、the old capital of Japan が Kyoto の内容を説明しています。つまり、二つの名詞が同じものを指しているのです。この同格の感覚は、英文解釈で非常に重要です。なぜなら、前の名詞の意味を後ろの名詞句が詳しく定義したり、抽象名詞の内容を具体化したりすることが多いからです。たとえば the fact that he was absent のような表現では、fact の内容を that 節が説明していますが、これも広い意味で同格の感覚につながります。英文では、前の名詞を詳しく説明する名詞が後ろに置かれることが多く、その関係を見抜けるようになると、名詞句の構造がかなりはっきり見えてきます。同格を修飾語や補語と混同せず、「同じものを別の形で言いなおしている」と捉えることが大切です。この感覚があると、長い名詞句も整理しやすくなります。

掟 2-1e　名詞は意味上の主語になる。

妥当性：A★★★★★　頻出度：B★★★★☆　重要度：A★★★★★

名詞は、表面上の主語ではなくても、意味上の主語になることがあります。これは、動名詞や分詞構文が表す動作や状態を、意味の上でだれが担っているかを示す名詞です。たとえば I am fond of my son's playing the piano. では、playing the piano という動名詞の意味上の主語は my son's です。また、Weather permitting, we will go on a picnic. では、permitting という分詞構文の意味上の主語は Weather です。このように、表面上は主語の位置にない名詞でも、準動詞の動作主として重要な役割を果たすことがあります。英文解釈では、この意味上の主語を見落とすと、だれがその行為をしているのかが曖昧になり、文全体の理解がぶれます。とくに動名詞や分詞構文では、表面の文型だけでなく、意味の上での主語を補って読む力が求められます。この視点を持つと、準動詞の構造が一段深く理解できるようになります。名詞は、目に見える主語になるだけでなく、見えない主語として文の意味を支えることもあるのです。

掟 2-1f　浮いた名詞は、まず目的語と思え。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

英文を読んでいて、文中に名詞が現れたとき、その名詞が主語でも補語でも同格でもないように見えるなら、まず目的語を疑ってください。英語では、名詞要素は他動詞の支配下に置かれることが非常に多く、文型把握の第一歩として「目的語ではないか」と考えることが有効です。

さらに注意したいのは、他動詞＋前置詞句＋名詞 という形で、本来の目的語が後方に移動している場合があることです。たとえば We regard him as a genius. では、him が目的語、a genius が補語です。しかし、語順によっては We regard as a genius / him. のように、目的語が後ろに回ることがあります。この場合、as a genius を見た段階で文を閉じず、後ろの him を本来の目的語として捉える必要があります。

同じことは take A into account にも当てはまります。たとえば You must take his age into account. では、his age が目的語です。しかし、実際の英文では You must take into account / his age. のように、into account が先に現れ、そのあとに目的語が置かれることがよくあります。ここでも、後ろに出てきた his age を目的語として読むことが重要です。

第3章　　品詞編Ⅱ　形容詞

2　2-2　形容詞総論

掟 2-2　形容詞は、文中で四つの働きをする。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

形容詞を理解するときは、「形容詞はどの語を説明し、どの位置で使われるか」を整理して押さえることが大切です。英文中で形容詞が担う中心的な役割は、主に四つあります。すなわち、名詞修飾、補語、分詞構文に関わる用法、そして the＋形容詞による名詞扱いです。この四つを押さえておくと、形容詞を単なる「性質を表す語」としてではなく、構文を形づくる重要な要素として理解できるようになります。形容詞は、名詞を前や後ろから修飾するだけでなく、補語として主語や目的語の状態を示したり、圧縮された構文の中で背景事情や理由を表したりすることがあります。また、the を伴うことで名詞相当の働きをすることもあります。英文解釈では、「形容詞がある」と気づくだけでは不十分で、「その形容詞が何を説明しているか」「修飾なのか補語なのか」「文全体にどう関わっているか」を見抜くことが重要です。形容詞の働きを正確に整理できるようになると、名詞句のまとまり、文型の判定、圧縮構文の読み取りが大きく安定します。

掟 2-2a　形容詞は名詞を修飾する。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

形容詞の最も基本的な働きは、名詞を修飾することです。a beautiful flower の beautiful や an important problem の important がその典型です。ここでは、形容詞が名詞の性質・特徴・状態を説明しています。したがって、形容詞が前からかかっている語は、まず名詞だと考えるのが基本です。この原則は、品詞判断の出発点として非常に有効です。英文解釈では、「この形容詞は何にかかっているのか」を確認することで、名詞句のまとまりが見えやすくなります。また、the people present や the students eager to learn のように、形容詞が後ろから名詞を修飾する場合もありますが、ここでも本質は同じで、「形容詞が名詞を説明している」と考えることが大切です。語の意味が分からない場合でも、修飾関係が見えれば、どこまでが一つの名詞句なのかをかなり正確に取ることができます。形容詞を見たら、まず「その説明の対象は何か」を確かめてください。これが、名詞句を安定して読むための基本になります。

掟 2-2b　形容詞は補語になる。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

形容詞は補語としても用いられます。She is happy. では happy が主語 She の状態を説明する主格補語ですし、I found the room empty. では empty が目的語 the room の状態を説明する目的格補語です。ここでは、形容詞は名詞を前から修飾しているのではなく、主語や目的語の内容・状態を述べています。この違いを見抜けるかどうかは、英文解釈で非常に重要です。形容詞＝名詞修飾とだけ覚えていると、この補語用法を見落としやすくなります。たとえば The sky turned red. の red は sky を修飾しているのではなく、「空が赤くなった」という主語の変化を表しています。

また、They kept the door open. の open も、door を説明する補語です。補語は、文型そのものを決める重要な要素であり、とくに第 2 文型・第 5 文型では中心的な役割を持ちます。したがって、形容詞を見たときは、「この語は名詞にかかっているのか、それとも主語や目的語の状態を述べているのか」を必ず確認してください。この区別ができると、文型把握の精度が大きく上がります。

掟 2-2c 形容詞は分詞構文に関わる形で現れる。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★☆ 重要度：B★★★★☆

形容詞は、主語の状態を表しながら、文全体に付加的な意味を添える形でも現れます。Aware of the danger, he stopped at once. の aware of the danger は、he was aware of the danger という内容が圧縮されたものと考えると理解しやすいでしょう。ここでは aware が主語 he の状態を表しつつ、文全体には「～なので」「～のままで」といった副詞的な意味を加えています。このような形は、名詞修飾や単純な補語とは少し異なり、主語の状態が背景事情として添えられている点が重要です。英文解釈では、この圧縮された状態表現を見抜く力が求められます。とくに、文頭に形容詞句が置かれている場合、それを単なる修飾語として流すのではなく、「主語の状態を表しているのではないか」と考えることが大切です。この用法は頻度こそ基本用法ほど高くありませんが、構造が圧縮されやすい英文では非常に有効な視点になります。形容詞は、名詞を飾るだけでなく、主語の状態を背景として提示することもあるのです。

掟 2-2d the＋形容詞で名詞扱い。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

形容詞は、the を伴って名詞相当の働きをすることがあります。the rich, the poor, the young, the unknown などがその例です。これらは形の上では形容詞ですが、文中では名詞として働いています。多くの場合、the rich は rich people、the poor は poor people のように、people を補って考えることができます。一方で、the unknown は something unknown や unknown things のように理解されることもあります。したがって、the＋形容詞は、文脈に応じて「形容詞＋people」または「something＋形容詞」に置き換えられると考えると理解しやすいです。この用法では、形容詞が単独で名詞句の中心になっているため、後ろに名詞が見えなくても不安になる必要はありません。英文解釈では、the の後ろに形容詞が来たとき、「名詞が省略されているのではないか」「人々や物事全体を表しているのではないか」と考えることが大切です。この視点を持つと、抽象的な表現や評論文の語法にも強くなります。

掟 2-2e 浮いた形容詞は、まず目的格補語と思え。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

英文を読んでいて、文中に形容詞が現れたとき、その形容詞が名詞を前から修飾しているわけでも、主格補語として主語を説明しているわけでもないなら、まず目的格補語を疑ってください。英語では、目的語の後に置かれた形容詞が、その目的語の状態や結果を説明することが非常に多いからです。たとえば I found the large conference room on the third floor completely empty. では、empty は the large conference room on the third floor を修飾しているのではなく、目的語そのものの状態を説明する目的格補語です。また They painted the old wooden door at the end of the hallway bright green. でも、bright green は the old wooden door at the end of the hallway の結果状態を表しています。このように、形容詞が文中で「浮いて」見えるときは、まず前の目的語を説明していないかを考えることが重要です。

第4章　　品詞編Ⅲ　副詞

1　2-3　副詞総論

掟 2-3　副詞は、動詞・形容詞・副詞・文全体を修飾する。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

副詞を理解するときは、「副詞は何を修飾するか」と「どこに置かれるか」をセットで押さえることが大切です。副詞は動詞だけを修飾する語ではありません。動詞、形容詞、副詞、そして文全体を修飾します。しかし、副詞で本当に重要なのは、それだけではありません。副詞は位置によって、何にかかるか、どこまで意味が及ぶかが変わりやすいのです。したがって、副詞を見たら、ただ「副詞だ」と認定するのではなく、「この副詞は何にかかっているか」「この位置にあるのはなぜか」を必ず確認してください。たとえば、動詞の近くにあれば動作の様子を表しやすく、文頭にあれば文全体への評価や判断を表しやすくなります。また、動詞句の内部に入る副詞は、助動詞や完了形、進行形と一体になって意味を調整することが多いです。副詞は文の骨格そのものにはなりにくい一方で、意味の精度と論理の流れを支える重要な品詞です。副詞の働きと位置を正確に見抜けるようになると、英文解釈の細部が一気にはっきり見えてきます。

掟 2-3a　副詞は動詞を修飾する。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

副詞の最も基本的な働きは、動詞を修飾することです。run quickly の quickly や、He slowly opened the door. の slowly がその典型です。ここでは、副詞が動作の様子、進み方、程度などを具体化しています。英文を読むときは、副詞が動詞にかかっていると分かれば、その動作がどのように行われるのかを正確に捉えやすくなります。たとえば quietly spoke なら「静かに話した」、carefully checked なら「注意深く確認した」というように、動作の質が明確になります。ただし、ここでも位置は大切です。副詞は比較的自由に動けますが、原則として意味の上でかかる動詞の近くに置かれる傾向があります。したがって、副詞を見たら、まずどの動詞にかかっているかを位置から確認してください。副詞が動詞を修飾する用法は最も基本ですが、それだけに油断しやすい部分でもあります。副詞を単なる「飾り」として流さず、その動作にどのような意味を加えているのかを丁寧に読むことが大切です。副詞の働きを正確に捉えることで、動詞の意味もより具体的に見えてきます。

掟 2-3b　副詞は形容詞を修飾する。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

副詞は形容詞を修飾することもあります。very kind の very や、extremely important の extremely がその例です。ここでは、副詞は形容詞の程度や強さを調整しています。形容詞そのものが性質や状態を表し、その前の副詞がその意味をさら

に細かく整えているのです。したがって、形容詞の前にある副詞は、その形容詞にかかっている可能性が高いと考えるとよいでしょう。たとえば very difficult なら「とても難しい」、quite possible なら「かなりありうる」というように、程度の違いがはっきり出ます。英文解釈では、こうした副詞を見落とすと、筆者の評価や判断の強さを誤って受け取ることがあります。副詞は動詞だけにかかるものだと思い込んでいると、この用法を見落としやすくなるので注意が必要です。副詞が形容詞にかかっている場合は、「何をしているか」ではなく、「どの程度そうなのか」を述べていることが多い、と考えると理解しやすくなります。副詞は、意味を精密に調整する語だという感覚をここでしっかり持ってください。

掟 2-3c 副詞は副詞を修飾する。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

副詞は、別の副詞を修飾することもあります。very slowly の very や、quite well の quite がその典型です。ここでは、副詞がさらに別の副詞の程度を調整しています。つまり、副詞は一段階だけでなく、二重に重なって意味を細かく整えることがあるのです。この場合も、位置が重要です。前に置かれた副詞が、直後の副詞にかかることが多いので、語の結びつきを丁寧に見る必要があります。たとえば very slowly なら slowly が中心で、very はその程度を強めています。quite well でも、well が中心の意味を担い、quite がその程度を補っています。英文解釈では、副詞が二つ続いているとき、「どちらが中心で、どちらがそれを修飾しているのか」を見分けることが重要です。これができると、語句のまとまりが自然に取れるようになり、意味の細かな違いも読み取りやすくなります。副詞は単独で働くだけでなく、他の副詞の意味を支えることもある、という点を押さえてください。ここまで理解できると、副詞をかなり立体的に読めるようになります。

掟 2-3d 副詞は文全体を修飾する。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

副詞は、文中の一語ではなく、文全体を修飾することもあります。Fortunately, he arrived on time. の Fortunately や、Perhaps she knows the answer. の Perhaps がその例です。こうした副詞は、動作の様子を述べているのではなく、話し手の判断、評価、推量、態度などを文全体に加えています。とくに文頭に置かれる副詞には、この用法が非常に多く見られます。たとえば Fortunately は「幸いにも」という評価、Perhaps は「おそらく」という推量を表しています。英文解釈では、このような副詞を見落とすと、筆者や話し手がその内容をどう捉えているのかが分からなくなります。副詞は単に「どのように」という意味を足すだけではなく、文全体に対する姿勢や論理の流れを示すこともあるのです。したがって、文頭の副詞を見たら、まず文全体にかかってい

ないかを疑うとよいでしょう。この用法を押さえることで、読解において筆者の立場や評価をより正確に読み取れるようになります。

掟 2-3e　なくても文型が成立するものは、まず副詞を疑う。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

副詞を見抜くうえで非常に有効なのは、「それがなくても文型が成立するか」を考えることです。He quickly finished his homework. では、quickly がなくても He finished his homework. で文型は成立します。She came here yesterday. でも、here や yesterday がなくても She came. で骨格は成り立ちます。このように、文の骨格である S・V・O・C に直接必要でない要素は、副詞であることが非常に多いのです。英文解釈では、まず骨格を立て、そのあとに周辺の修飾語を整理することが大切ですが、そのとき最初に疑うべきなのが副詞です。ただし、副詞は位置によって修飾範囲が変わることがありますので、単に「不要だから副詞」と処理するだけでなく、「どこに置かれて、何にかかっているか」まで見る必要があります。また、同格や挿入句など、骨格に不要でも副詞ではない要素もあるので、「すべて副詞」と決めつけるのではなく、「まず副詞を疑う」という姿勢が最も正確です。この原則は、骨格と修飾を分けるための強力な手がかりになります。

掟 2-3f　動詞句の内部に入る語は、副詞であることが多い。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

副詞は、動詞句の内部に入ることが非常に多いです。He has never seen it. の never、She may already know the truth. の already、He is still waiting. の still などがその典型です。これらは、助動詞＋動詞、have＋過去分詞、be＋現在分詞といった動詞句の中に入り、その内容を修飾しています。ここでも位置が重要です。副詞がどこに入っているかによって、どの動詞句を修飾しているのかが見えます。たとえば never は has seen という完了の動詞句全体にかかり、already は may know の内容を補い、still は is waiting の継続性を強めています。英文解釈では、動詞句の中に入る副詞を見落とすと、時制や相、推量のニュアンスまで取り違えることがあります。とくに never, already, still, often, always などはこの位置に現れやすいので、動詞句の内部にある語はまず副詞候補として意識するとよいでしょう。副詞は文の周辺にだけ現れるのではなく、動詞句の内部に深く入り込んで意味を調整することも多いのです。

掟 2-3g　文頭の副詞は、文全体にかかることが多い。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

文頭に置かれた副詞は、文全体にかかることが多いです。However, this is not true. の However、Therefore, we must act now. の Therefore、

Unfortunately, he missed the train. の Unfortunately などがその例です。これらは、特定の語だけを修飾しているのではなく、その文全体に論理関係や評価を加えています。副詞は位置が重要だと述べましたが、文頭はとくに重要な位置です。文頭に出た副詞は、しばしばその文全体の読み方を決めます。たとえば However は逆接、Therefore は結果、Unfortunately は評価を示しています。英文解釈では、文頭の副詞を見落とすと、論理の流れそのものを取り違えることがあります。したがって、文頭副詞を見たら、「この一語が文全体にどんな意味を添えているか」を必ず確認してください。副詞の意味を単独で覚えるだけではなく、「文頭に出たとき、文全体にどう働くか」を意識することが大切です。この視点を持つと、論説文や説明文の読みがかなり安定します。

掟 2-3h　文修飾副詞は、位置によって意味のかかり方が変わる。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

副詞は位置が重要です。とくに文修飾副詞は、文頭にあるか、動詞の近くにあるかで、意味のかかり方が変わることがあります。この点は、英文解釈で必ず意識してください。たとえば Happily, he didn't die. の happily は、「幸いにも」という話し手の判断を表し、文全体にかかっています。これに対して He didn't die happily. の happily は die にかかり、「幸福に死んだわけではない」という意味になります。このように、同じ副詞でも、置かれる位置が変わると、修飾の範囲と意味の方向が変わります。副詞を見たときに意味だけで判断すると、この違いを見落としやすくなります。大切なのは、「どこに置かれているかを見て、その副詞が文全体にかかるのか、それとも動詞など一部の語にかかるのかを判断すること」です。副詞では、位置そのものが意味を左右します。したがって、副詞を読むときは、「意味」と「位置」を切り離さず、必ず一緒に考えるようにしてください。この意識があるかどうかで、解釈の精度は大きく変わります。

第5章　　品詞編Ⅳ　動詞

1　2-4　動詞総論

掟 2-4　動詞は、文の骨格を作る中心である。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

動詞を理解するときは、まず「動詞が文の骨格を決めている」という意識を持ってください。名詞や形容詞や副詞は文に内容を加えたり、意味を細かく調整したりしますが、文型そのものを決めるのは動詞です。たとえば He laughed. は laugh が何も取らないので SV、She likes music. は like が目的語を取るので SVO、He became famous. は become が補語を取るので SVC、They made him captain. は make が目的語と補語を取るので SVOC になります。この違いは、主語の違いではなく、動詞が何を要求するかの違いです。したがって、英文を読むときは、意味を漠然と追う前に、「この動詞は何を必要としているか」を見てください。動詞が見えれば文型が見えます。文型が見えれば、どこまでが骨格で、どこからが修飾語かも見えてきます。英文解釈では、まず動詞、次に文型という順で読む習慣を身につけることが大切です。動詞は意味の中心であると同時に、構造の設計図でもあります。

掟 2-4a　動詞は自動詞にも他動詞にもなる。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

動詞を見るときは、その動詞が自動詞か他動詞かを必ず意識してください。自動詞は目的語を取らず、他動詞は目的語を取ります。ただし、ここで大切なのは、「同じ動詞が文によって自動詞にも他動詞にもなることが少なくない」という点です。たとえば The door opened. では open は自動詞で、「ドアが開いた」です。一方、He opened the door. では open は他動詞で、「彼はドアを開けた」です。change, move, break, stop なども同じように、使い方によって性質が変わります。したがって、動詞を単語単体で決めつけてはいけません。必ず後ろを見て、目的語を取っているかどうかで判断してください。英文解釈では、この確認を怠ると、SV と SVO の区別が崩れ、文全体の構造も不安定になります。動詞は「辞書にこう書いてあるから」ではなく、「この文の中でどう使われているか」で判断することが重要です。この姿勢は、動詞編だけでなく、英文解釈全体の土台になります。

掟 2-4b　動詞が文型を決める。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

文型は、主語や語順だけで機械的に決まるのではなく、動詞が何を必要とするかによって決まります。He laughed. が SV、She likes music. が SVO、He became famous. が SVC、They made him captain. が SVOC になるのは、すべて動詞の性質によるものです。laugh は何も取らず、like は目的語を取り、become は

補語を取り、make は目的語と補語を取ります。したがって、文型を見抜くときは、「この動詞のあとに何が必要か」という観点で考えることが最も重要です。逆に、この観点がないと、目的語と補語を取り違えたり、前置詞句を骨格だと勘違いしたりします。英文解釈では、文型は記号暗記ではなく、動詞の要求を読む技術です。SV、SVC、SVO という記号だけ覚えても不十分で、「なぜこの文型になるのか」を動詞から説明できるようにしてください。そうすると、未知の文でも骨格がかなり安定して取れるようになります。文型は、動詞の性質が表面に現れた結果だと考えることが大切です。

掟 2-4c　動詞を見たら、まず「何を取るか」を考える。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

動詞を見たら、まず意味を当てにいくのではなく、「この動詞は何を取るのか」を考えてください。目的語を取るのか、補語を取るのか、名詞を二つ取るのか、目的語と補語を取るのか、それとも何も取らないのか。この問いに答えられれば、文型はかなり高い精度で決まります。たとえば found という動詞でも、I found the key. なら目的語だけですが、I found the room empty. なら the room を目的語、empty を補語として取っています。この違いを見ずに found を単に「見つけた」とだけ覚えていると、文型判断は不安定になります。英文解釈では、動詞は意味の中心であると同時に、構造の設計図でもあります。したがって、動詞の意味は、文型の中で具体化すると考えるべきです。構造を先に押さえ、そのあとで訳語を整える。この順序を守ると、基本動詞の多義にも振り回されにくくなります。動詞を見たら、まず「何を取るか」。これを徹底することが、文型を安定して読むための第一歩です。

2　2　文型ごとの動詞

掟 2-4d　一般動詞の第 1 文型は、存在・移動を表すことが多い。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

第 1 文型（SV）の一般動詞は、目的語も補語も取らないので、意味は比較的限られます。多くの場合、「存在」か「移動」を表します。He lives in Tokyo. は「東京に住んでいる」という存在、He went to the station. は「駅へ行った」という移動です。もちろん laugh, smile, cry のような動作動詞もありますが、SV を見たら、まず「どこにいるか」「どこへ行くか」「どう動くか」という方向で意味を取ると、解釈が安定します。なぜなら、第 1 文型は動詞の後ろに核となる名詞要素を持たないため、後ろの前置詞句や副詞句が意味の中心になりやすいからです。たとえば arrive at the station, live in Kyoto, go to school のように、前置詞句がなければ意味がぼやけることも多いです。したがって、SV は「単純な文型」と考えて軽く扱わず、後ろの副詞的要素まで含めて読む必要があります。第 1 文型では、存在・移動を軸にして文全体を組み立てる意識を持ってください。

掟 2-4e　第 2 文型は、「～になる」「～の状態である」を表すことが多い。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

第 2 文型（SVC）は、主語と補語がイコール関係になる文型です。したがって、意味の中心は「～である」「～になる」「～のように見える」「～のままである」といった方向になります。He became famous. は「有名になった」、She looks happy. は「幸せそうだ」、The door remained open. は「ドアは開いたままだった」です。ここで大切なのは、補語 C を単なる付け足しだと考えないことです。C は主語の内容や状態を決める中心的な要素です。become, remain, seem, appear, look, feel, sound, smell などは、この文型を作りやすい代表的な動詞です。英文解釈では、第 2 文型を見たら、まず「主語がどんな状態か」「主語が何になったか」を押さえてください。補語が主語をどう説明しているかが分かれば、この文型はかなり安定して読めます。S と C の関係をつかむことが、第 2 文型の核心です。ここを正確に読めるようになると、状態・変化・印象を表す英文が一気に読みやすくなります。

掟 2-4f　be 動詞は、主語と補語を結ぶ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

be 動詞は、英文解釈では特別扱いすべき動詞です。一般動詞のように動作を表すというより、主語と補語を結びつけ、「主語は何であるか」「主語はどんな状態であるか」を示します。He is a teacher. では a teacher が主語 He の内容を説明し、She is happy. では happy が主語 She の状態を表しています。したがって、be の後ろでは目的語ではなく補語を探さなければなりません。ここを誤ると、第 2 文型を第 3 文型と誤読してしまいます。また、be は進行形・受動態の一部としても使われるので、後ろに現在分詞なのか過去分詞なのか、あるいは形容詞なのかを見極める必要があります。英文解釈では、be の後ろに何が来ているかを見ることが非常に重要です。be は最も基本的な動詞ですが、最も油断できない動詞でもあります。be が出たら、主語と後ろの語の関係を必ず確認してください。その一手間が、文全体の構造理解を大きく安定させます。

掟 2-4g　一般動詞の後ろでは、まず目的語を疑う。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

一般動詞が出てきたら、その後ろに名詞要素があるかを見て、あればまず目的語を疑ってください。I like music. の music、She bought a bag. の a bag がその典型です。もちろん、一般動詞の後ろの名詞要素が必ず目的語とは限りません。補語や同格の可能性もあります。しかし、最初の当たりとしては、「まず目的語」が最も有効です。逆に、最初から補語や同格を疑いすぎると、構造が不安定になります。大切なのは、「まず目的語を疑う」のであって、「必ず目的語だと決めつける」ことではありません。つまり、第一候補として目的語を置き、そのあとでその動詞が本当にそれを取るかを確認する、

という順序が重要です。英文解釈では、この最初の見立てが非常に大きいです。一般動詞の後ろに名詞が見えたら、まず目的語。この基本動作を身体に染み込ませてください。それだけで、第 3 文型と第 5 文型の区別もかなり安定してきます。

掟 2-4h SVOO なら、give 系か take 系を疑う。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

第 4 文型（SVOO）では、意味は大きく give 系と take 系に分かれることが多いです。give 系は「人に物・情報を与える」型で、give, show, teach, tell, send などが代表です。He gave me a book. は「彼は私に本をくれた」です。一方、take 系は「人から何かを奪う・失わせる」型で、cost, save, spare, deny などが代表です。This mistake cost him his job. は「この失敗のせいで彼は職を失った」です。どちらも SVOO ですが、意味の方向は逆です。したがって、SVOO を見たら、O1 が受け手なのか、不利益を受ける側なのかを考えてください。この視点を持つと、第 4 文型の解釈がかなり安定します。名詞が二つ並んでいることだけを見て終わるのではなく、その二つの名詞がどんな関係にあるかを意味の方向から捉えることが重要です。SVOO は、文型と意味が強く結びつく代表例です。ここを整理できると、第 4 文型が単なる語順暗記ではなくなります。

掟 2-4i SVOC なら、make 系・think 系・call 系・put 系を疑う。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

第 5 文型（SVOC）は、目的語 O と補語 C の関係を見抜くことが中心です。この文型は、意味の型で整理すると理解しやすくなります。make 系は「O を C にする」で、make, get, keep, leave などが入ります。He made me happy. は「彼は私を幸せにした」です。think 系は「O を C だと思う」で、think, believe, find, consider などが代表です。I found the story interesting. は「私はその話をおもしろいと思った」です。call 系は「O を C と呼ぶ」で、call, name, elect などが入り、They called him a genius. は「彼らは彼を天才と呼んだ」です。put 系は「O を C の状態に置く」で、put, set, place などが代表です。SVOC を見たら、まず O と C がどんな関係にあるかを見てください。そして、その関係に合う意味のグループを当てていくと、構造も意味も安定します。第 5 文型は、型で整理するのが最も有効です。ここが分かると、英文の圧縮された意味関係が一気に見えるようになります。

3　3 語形・接頭辞・語順

掟 2-4j 文字数の多い動詞は、まず他動詞を疑う。

妥当性：A★★★★☆ 頻出度：A★★★★☆ 重要度：B★★★★☆

これは絶対的な法則ではありませんが、実戦的にはかなり使える経験則です。英語では、短い基本動詞には自動詞が多く、長めのラテン系・フランス系の動詞には他動詞が多い

傾向があります。たとえば discuss, consider, establish, maintain, require などは、後ろに目的語を取りやすい動詞です。したがって、見慣れない長めの動詞が出てきたら、まず「この動詞は何かを目的語に取りそうだ」と考えるのは有効です。もちろん、長いから必ず他動詞とは限りませんし、短い動詞にも他動詞は多くあります。したがって、これはあくまで最初の仮説です。最後は必ず後ろを見て確認してください。それでも、未知語に出会ったときに完全に手がかりなしで読むより、「まず他動詞を疑う」という出発点を持つほうが、構造把握はずっと速くなります。経験則も、英文解釈では立派な武器です。仮説を持って読むことで、文型判断の精度は大きく上がります。

掟 2-4k 動詞の接頭辞に注目する。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：B★★★★☆ 重要度：A★★★★★

動詞は、接頭辞を見ることで意味だけでなく、後ろに来やすい前置詞や構文まで予測できることがあります。たとえば at- や ac- には「ある方向へ向かう」「ある状態へ持っていく」という感覚があり、adapt A to B（A を B に適応させる），add A to B（A を B に加える），attribute A to B（A を B に帰する）のように to を伴うものが多く見られます。com- や con- には「共に」という感覚があり、compare A with B（A を B と比較する），connect A with B（A を B と結びつける）のように with と結びつきやすいです。dis- には「離れて」「分けて」の感覚があり、distinguish A from B（A を B と区別する），disconnect A from B（A を B から切り離す）のように from と結びつくものがあります。もちろん、すべてがこの通りに動くわけではありません。しかし、接頭辞を見ることで、意味の方向と構文の方向を同時に予測できるのは大きな利点です。未知の動詞ほど、接頭辞を手がかりにしてください。この視点を持つと、語彙と構文がばらばらではなく、一つの体系として見えてきます。

掟 2-4l impose A on B 型は、impose on B A の語順になることがある。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★☆ 重要度：A★★★★★

動詞の中には、基本構文としては V A 前置詞 B の形を取るのに、実際の英文では V 前置詞 B A の語順になるものがあります。impose A on B はその代表です。基本形は「A を B に課す」ですが、英文では impose on B A のように、前置詞句が先に出て A が後ろに回ることがあります。この感覚を知らないと、on の直後だけを見て構文を早合点してしまいます。同じように、bestow A on B（A を B に授ける），confer A on B（A を B に与える）なども、前置詞句が前に出て、目的語が後ろに置かれることがあります。したがって、動詞の直後に前置詞が来たからといって、すぐに目的語がないと判断してはいけません。後ろまで見て、本来の目的語が残っていないかを確認する必要があります。英文解釈では、表面の語順だけでなく、もとの基本構文を意識することが重要です。そうすることで、長い英文の中でも語順の変化に惑わされにくくなります。

4　4　意味と構文

掟 2-4m　中学レベルの動詞は、文型ごとに意味を覚える。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

中学レベルの基本動詞は、意味が易しそうに見えるため、かえって雑に覚えられがちです。しかし、英文解釈では、こうした基本動詞ほど文型によって意味が大きく変わります。したがって、一語一義で覚えるのではなく、文型ごとに整理して覚える必要があります。make はその典型です。SV なら「進む」で、The ship made slowly through the fog. は「その船は霧の中をゆっくり進んだ」です。SVC なら「～になる」で、He will make a good teacher. は「彼はよい先生になるだろう」です。SVO なら「～を作る」で、He made a chair. は「彼は椅子を作った」です。SVOC なら「O を C にする」で、He made me happy. は「彼は私を幸せにした」です。このように、同じ make でも文型が変われば意味が変わります。したがって、基本動詞は、まず文型、次に意味という順で覚えてください。難語よりも、基本動詞の多義のほうが解釈を狂わせやすいことを忘れないでください。基本動詞ほど、構文とセットで押さえることが大切です。

掟 2-4n 「奪う」意味の動詞は、take 系か rob 系かを見分ける。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

「奪う」と訳せる動詞は多いですが、構文は大きく二系統に分かれます。take 系は S V B from A、つまり「A から B を取る」型です。take a book from him, remove dust from the table のように、「取られるもの」が目的語になります。これに対して rob 系は S V A of B、つまり「A から B を奪う」型です。rob him of his money, deprive them of hope のように、「奪われる相手」が目的語になります。同じ「奪う」でも、何が直接目的語になるかが違うのです。したがって、訳が似ているからといって同じ構文だと思ってはいけません。英文解釈では、意味だけでなく、「何が動詞の直後に置かれているか」「どの前置詞が使われているか」を見る必要があります。この区別ができると、目的語の認定がかなり安定します。奪う系の動詞は、意味と構文の結びつきを学ぶうえで非常に大切です。ここを整理できると、動詞と前置詞の組み合わせに対する感覚も鋭くなります。

掟 2-4o　意味が似ている動詞は、使い方も同じであることが多い。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

動詞は、一語ずつ孤立して覚えるより、意味の近い動詞どうしをまとめて覚えるほうが効率的です。英語では、意味が似ている動詞は、後ろに取る語や前置詞、文型まで似ていることが多いからです。たとえば give, show, teach, tell は、いずれも「人に何かを与える」という方向を持ち、SVOO を作りやすい仲間です。また、adapt A to B, add A to B, attribute A to B は、いずれも to を伴って「A を B に向ける・加える・帰する」という構文を取ります。さらに compare A with B, connect A with B

のように with を伴う仲間、distinguish A from B, disconnect A from B のように from を伴う仲間もあります。もちろん、意味が近いからといって完全に同じとは限りません。しかし、実戦では「この動詞はどの仲間か」と考えることが非常に有効です。未知の動詞に出会っても、既知の動詞グループの中に位置づけられれば、構文まで予測しやすくなります。動詞は、意味の仲間ごとに整理して覚えることが大切です。

掟 2-4p 文型で意味が決まる。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

動詞は、単語そのものの意味だけでなく、どの文型に入っているかで意味の方向がかなり決まります。したがって、英文解釈では「まず動詞の意味を当てる」のではなく、「まず文型を見る」ことが重要です。たとえば SVOO なら、意味は give 系か take 系であることが多いです。つまり「人に何かを与える」か、「人から何かを奪う・失わせる」かです。SVOC なら、意味は make 系・think 系・call 系・put 系に分かれやすいです。make 系なら「O を C にする」、think 系なら「O を C だと思う」、call 系なら「O を C と呼ぶ」、put 系なら「O を C の状態に置く」です。このように、文型が見えた時点で、意味の候補はかなり絞れます。英文解釈では、語彙と構文を切り離してはいけません。文型は意味を導く手がかりです。基本動詞ほどこの傾向が強いので、文型から意味を読む習慣をつけてください。そうすると、基本動詞の多義もむしろ整理しやすくなります。

掟 2-4q remind 型の動詞は、受動態で使われることが多い。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

remind 型の動詞は、能動態だけでなく、受動態で使われることが非常に多いので注意してください。たとえば remind, inform, convince, warn などは、「人に何かを知らせる・気づかせる・納得させる・警告する」といった意味をもち、目的語に人を取ることが多い動詞です。こうした動詞は、英文では「人」が主語に出てきた受動態の形で現れやすくなります。He was reminded of his childhood. は「彼は子ども時代を思い出させられた」、She was informed of the change. は「彼女はその変更を知らされた」です。したがって、この型の動詞を見たら、能動態だけでなく受動態での出現も強く意識してください。とくに英文解釈では、be＋過去分詞のあとに前置詞句が続く形を見たとき、それを単なる受動態として流すのではなく、「もとの能動態ではどのような目的語構造だったか」を考えることが大切です。remind 型の動詞は、受動態に直しても意味が立ちやすいため、読解では非常によく出ます。こうした型を知っているかどうかで、受動態の読みやすさは大きく変わります。

第6章　　第 3 章　スラッシュの原則

掟 3-0　語数で切るな。まとまりで切れ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

スラッシュリーディングでは、「何語ごとに切るか」を機械的に決めてはいけません。大切なのは、語数ではなく構造のまとまりで切ることです。英語の文は、主語・動詞・目的語・補語といった骨格に、前置詞句、不定詞句、分詞、関係詞節などの修飾要素が積み重なってできています。したがって、スラッシュはその構造上のまとまりを見える形にするために入れるものです。目安としては 3～6 語程度で一区切りにすると読みやすくなりますが、それよりも優先すべきなのは「一まとまりの語句を壊さないこと」です。たとえば in the room や to solve the problem、who lives next door などは、それぞれ一つのまとまりとして扱う必要があります。語数にこだわってこれらを分断してしまうと、かえって構造が見えにくくなります。スラッシュは訳しやすくするための道具ではなく、構文を可視化するための道具です。したがって、スラッシュを入れるときは、「ここはどこからどこまでが一つの単位か」を常に意識してください。語数はあくまで目安であり、最終的な判断基準は構造にあります。この原則を押さえることで、スラッシュの精度は一気に安定します。

掟 3-1　主節の前に長い要素があれば、主節の直前で切れ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

英文では、主節の前に長い要素が置かれることがよくあります。たとえば、前置詞句、不定詞句、分詞構文、副詞節、長い副詞句などが文頭に来ると、その部分を読んでいる間は、まだ文の骨格が始まっていないことがあります。したがって、そのような長い要素を見たら、まずそこを一まとまりとして取り、主節が始まる直前でスラッシュを入れることが重要です。たとえば After reading the long report on environmental problems in several Asian countries, / the students began a lively discussion in class. のように切れば、After 以下全体が前置きの要素であり、the students began が主節の骨格だとはっきり分かります。また Walking slowly along the quiet road behind the old school building, / he suddenly found a small lost dog. のような文でも、主節の前で切ることで、he found が骨格の始まりだと見えやすくなります。英文解釈では、文頭に長い要素があると、それを主語や主節の一部と混同しやすくなります。だからこそ、前置きの長い要素と主節の骨格を分けることが大切です。主節の前で切る。この習慣を徹底すると、文の見通しが大きくよくなります。

掟 3-2　長い主語を見たら、主語の終わりで切れ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

英文解釈では、主語が長くなるほど、どこからどこまでが主語なのかが見えにくくなります。とくに、前置詞句、不定詞句、分詞、後置修飾などが重なって長い名詞句になっている場合、主語の終わりを正確につかむことが重要です。そこで、長い主語を見たら、まずその全体を一まとまりとして取り、その終わりでスラッシュを入れてください。これによって、その後に来る動詞がはっきり見え、文の骨格である S＋V が一気に安定します。たとえば The tall man in the black coat near the front door / is my uncle. のように切れば、is が主動詞であることがすぐに分かります。逆に、The tall man / in the black coat / near the front door is ... のように細かく切りすぎると、主語全体のまとまりが弱くなり、骨格が見えにくくなることがあります。スラッシュの目的は、文を細かく刻むことではなく、構造上の大きな単位を見える形にすることです。したがって、長い主語はまず一つの名詞句として抱え、その終わりで区切ることが大切です。この習慣を身につけると、長文でも主動詞を素早く発見できるようになります。

掟 3-3　長い目的語を見たら、その終わりで切れ。そこで骨格が見える。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

英文では、目的語が長くなると、どこまでが目的語なのかが見えにくくなり、その後ろの要素との境目も曖昧になりやすくなります。とくに、形容詞句、前置詞句、不定詞句、関係詞節などが重なって長い名詞要素になっている場合、目的語全体をまず一まとまりとして取り、その終わりでスラッシュを入れることが重要です。たとえば The teacher explained / the basic rules for writing clear English sentences in a short time / to the students. のように切れば、the basic rules ... が explained の目的語だと分かり、そのあとに to the students が続くことも見えやすくなります。また、I finally understood / the main idea of the article about language learning in modern schools / after reading it twice. のような文でも、長い目的語の終わりで切ることで、after reading it twice が骨格の外にある副詞要素だと判断しやすくなります。英文解釈では、長い目的語の途中で細かく切りすぎると、名詞句全体のまとまりが壊れ、文型が見えにくくなることがあります。したがって、長い目的語を見たら、まずその全体を抱え、その終わりで切ってください。この習慣を身につけると、SVO の骨格がかなり安定して取れるようになります。

掟 3-4　前置詞を見たら切れ。だが、名詞に強くかかるなら、まとめて抱えよ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

前置詞句は、スラッシュを入れるときの有力な切れ目です。なぜなら、前置詞はその後ろの名詞要素と結びついて、一つのまとまりを作るからです。したがって、基本的には前置詞を見たら、その前で切ると構造が見えやすくなります。たとえば He sat down / in the chair. のように、in the chair が動詞 sat down にかかっている場合は、この切り方が自然です。しかし、前置詞句が直前の名詞に強くかかっているときは、機械的

に切らないほうがよい場合があります。たとえば The man in the chair / looked tired. では、in the chair は man を後ろから修飾しており、The man in the chair 全体が主語です。このような場合は、前置詞句を名詞句の一部としてまとめて抱えたほうが、骨格が見えやすくなります。大切なのは、「前置詞の前で必ず切る」ことではなく、「前置詞句が何にかかっているかを見る」ことです。前置詞句が動詞や文全体にかかるなら切る、名詞に強くかかるなら名詞ごと抱える。この判断ができるようになると、スラッシュの精度は一気に上がります。

掟 3-5　to 不定詞を見たら、前と混ぜるな。ひとかたまりで取れ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

to 不定詞は、スラッシュを入れるときに非常に重要なまとまりです。なぜなら、to の後ろには動詞の原形が来て、そこから先が一つの意味の単位を作ることが多いからです。したがって、to 不定詞を見たら、まずひとかたまりとして取ることが基本になります。たとえば He went to the library / to study English. では、to study English 全体で「英語を勉強するために」という副詞的なまとまりです。また、He wants / to be a doctor. では、to be a doctor が want の目的語として一つの単位になっています。このように、名詞的用法でも副詞的用法でも、to 不定詞はまず一まとまりで読む必要があります。さらに、形容詞的用法でも同じです。たとえば I have a lot of homework / to do tonight. では、to do tonight が homework を後ろから修飾しており、「今夜やるべき宿題」という意味になります。ここでも、to 不定詞全体が一つのかたまりとして名詞に結びついています。英文解釈では、まず不定詞句のまとまりを守り、そのあとでそれが名詞的・形容詞的・副詞的のどの用法かを判断してください。最初に大切なのは、用法分類よりも、構造上のまとまりを壊さずに読むことです。

掟 3-6　長い名詞要素が二つ続いたら、その境目で切れ。文型の変化を疑え。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

英文で、長い名詞要素が二つ続くときは、その境目を強く意識してください。理由は、そこが文型の変化に気づく重要な地点だからです。とくに、第 4 文型 SVOO では、動詞のあとに「人」や「相手」を表す名詞要素と、「物」や「内容」を表す名詞要素が続きます。たとえば He gave the young student from Osaka / a very difficult assignment for the weekend. のような文では、最初の長い名詞要素と、次の長い名詞要素の境目を意識することで、「これは SVOO だ」と気づきやすくなります。逆に、この切れ目を意識しないと、後ろの名詞要素を前の名詞要素の説明や修飾の続きのように読み、骨格を取り違えやすくなります。

また、この原則は、目的語が後ろに回る語順にも有効です。たとえば impose on the students in the class / a strict new rule about cell phones のような形では、前置詞句のあとに長い名詞要素が現れます。ここで境目を意識できれば、「これは

前置詞句の続きではなく、後ろに本来の目的語が残っているのではないか」と考えやすくなります。bestow on the winner of the contest / a special prize のような文も同様です。
したがって、長い名詞要素が二つ続いたら、まずその境目を切ってください。これは語をばらすためではなく、文型を見抜くための切れ目です。長い名詞要素の境界を見抜けるようになると、SVOO や語順変化の構文がかなり安定して読めるようになります。

掟 3-7 前置詞のついていない、名詞または冠詞・所有格・数詞などの前で切れ。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

英文を読んでいて、前置詞を伴わずに名詞、あるいは冠詞・所有格・数詞・some, any, all などで始まる語群が現れたら、その前で切ることを意識してください。これは、そこから新しい名詞要素が始まる可能性が高いからです。とくに英語では、目的語、補語、同格、SVOO の第二目的語などが、前置詞なしでそのまま現れることが多く、その境目を見抜けるかどうかで文型の把握が大きく変わります。たとえば He gave me / a very useful dictionary for beginners. では、a で始まる新しい名詞要素が現れているので、その前で切ると SVOO の構造が見えやすくなります。また They elected him / captain of the team. でも、him のあとに前置詞なしで新しい名詞要素 captain が現れており、ここで切ることで目的格補語の存在に気づきやすくなります。さらに I bought her / two interesting books about art. のように数詞で始まる場合や、He told us / some surprising news about the plan. のように some で始まる場合も同じです。英文解釈では、前置詞句はまとまりとして見えやすい一方、前置詞のない名詞要素は前後と続いて見えやすく、境界を見失いがちです。だからこそ、前置詞のついていない名詞、冠詞、所有格、数詞、some, any, all などが現れたら、その前でいったん区切り、「ここから新しい名詞要素が始まるのではないか」と疑うことが大切です。この習慣を持つと、文型と構造の切れ目がかなり明確になります。

掟 3-8 目的語の後に形容詞が来たら、その前で切れ。

妥当性：A★★★★★ 頻出度：A★★★★★ 重要度：A★★★★★

英文で、目的語の後に形容詞が現れたときは、その前で切ることを意識してください。ここは、第 5 文型 SVOC の補語に気づくための非常に重要な切れ目です。たとえば I found the room / empty. では、empty は the room を後ろから修飾しているのではなく、目的語 the room の状態を説明する目的格補語です。したがって、the room / empty の境目で切ることで、「ここは目的語＋補語の構造だ」と見抜きやすくなります。
この原則は、現在分詞や過去分詞にも当てはまります。たとえば I saw the boy / running across the street. では、running 以下が the boy の動作を表す目的格補語ですし、I heard my name / called in the hall. では、called が my

name の受ける状態を示しています。ここでも、後ろの現在分詞・過去分詞は単なる修飾語ではなく、目的語の状態や動作を述べる補語として働いています。
さらに重要なのは、スラッシュの後に来る形容詞句は、直前の名詞にかかる後置修飾か、SVOC の C に当たることがほとんどだということです。この場合は、動詞を見てください。SVOC を取る動詞であれば C、取らない動詞であれば後置修飾です。したがって、この切れ目を見たら、まず動詞の性質を確認し、「この動詞は補語を取れるか」を判断することが大切です。この視点を持つと、形容詞句・現在分詞句・過去分詞句の役割がかなり明確に見えるようになります。

掟 3-9　動詞が二つ見えたら、その境目で切れ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

英文を読んでいて、動詞、動詞と続いて見えるときは、その境目を強く意識してください。これは、後ろの動詞が新しい節の中心になっている可能性が高いからです。とくに多いのが、関係詞節や同格節です。たとえば The fact / that he was absent / surprised everyone. では、fact のあとに that he was absent という同格節が続いています。また、The man / who lives next door / is a doctor. では、man のあとに who lives next door という関係詞節が続いています。こうした文では、前の名詞句のあとでいったん切り、後ろを新しい説明のまとまりとして読むと構造が非常に見えやすくなります。
この見極めで大切なのは、まず副詞要素を省いて考えることです。前置詞句や副詞句が挟まっていると、主節の骨格が見えにくくなるからです。たとえば上の The man / who lives next door / is a doctor. という文でも、副詞要素である next door をいったん外して考えると、who lives / is と、動詞要素が続いていることが見えやすくなります。こうすると、lives が関係詞節の動詞で、is が主節の動詞だと判断しやすくなります。英文解釈では、動詞が二つ見えたら、まず副詞要素を取り除いて骨格を単純化し、そのうえで後ろが新しい説明節になっていないかを疑ってください。スラッシュは、こうした節の境界を見える形にするために入れるものです。

掟 3-10　接続詞を見たら、その前で切れ。そこから新しい流れが始まる。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

接続詞は、スラッシュを入れるときの非常に重要な切れ目です。なぜなら、接続詞は語と語、句と句、節と節をつなぐだけでなく、そこから新しい流れが始まる合図でもあるからです。したがって、接続詞を見たら、その前で一区切り入れることを基本にしてください。たとえば He stood up / and opened the window. では、and の後ろに新しい動作が続いています。また I was tired / but I kept working. では、but の後ろに逆接の新しい流れが始まっています。
この原則は、副詞節や関係詞節にも有効です。たとえば I stayed home / because

it was raining. では、because の後ろに理由を表す副詞節が続いていますし、I will call you / when I get home. では、when の後ろに時を表す副詞節が来ています。また、The man / who lives next door / is a doctor. では、who の後ろに関係詞節が続き、前の名詞を説明しています。これらは種類こそ異なりますが、いずれも「接続の働きをする語の後ろに新しいまとまりが始まる」という点で共通しています。英文解釈では、接続詞や関係詞を単なる意味語として流してしまうと、論理の切り替わりや節の境界が曖昧になります。したがって、接続詞を見たら、その前で切る。そして、「後ろはどのような節なのか」を確認する。この習慣を持つと、文の流れと構造がかなり明確に見えるようになります。

掟 3-11　関係詞を見たら、その前で切れ。後ろは前の名詞の説明である。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

関係詞は、スラッシュを入れるときの非常に重要な切れ目です。なぜなら、関係詞の後ろには、直前の名詞を詳しく説明するまとまりが始まるからです。したがって、関係詞を見たら、その前で一区切り入れることを基本にしてください。たとえば The man / who lives in the large white house at the end of this street / is a doctor. では、who 以下全体が man を説明する関係詞節です。また The book / that I borrowed from the city library last Friday afternoon / was much more useful than I had expected. でも、that 以下が book の説明になっています。このように、関係詞の前で切ると、「ここまでが名詞の本体」「ここから先がその説明」と視覚的に分かれ、構造が非常に見えやすくなります。英文解釈では、関係詞節を名詞本体と混同すると、主語や目的語の範囲を誤りやすくなります。とくに、関係詞節の中にさらに前置詞句や副詞要素が入ると、どこまでが説明なのかが見えにくくなります。だからこそ、最初に関係詞の前で切ることが大切です。この習慣を徹底すると、長い名詞句や複雑な後置修飾もかなり整理しやすくなります。

掟 3-12　カンマを見たら、その前で切れ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

カンマは、スラッシュを入れるときの非常に強い手がかりです。英文では、カンマの後ろに補足説明、挿入、言い換え、並列、あるいは文全体へのコメントが続くことが多いからです。したがって、カンマを見たら、まずその前で一区切り入れることを基本にしてください。たとえば My father, / tired after the long trip, / went straight to bed. では、My father が骨格の主語であり、カンマの後ろは補足的な説明です。また He opened the window, / but said nothing. のような文でも、カンマの位置で切ると、その後ろに新しい流れが始まることがはっきり見えます。英文解釈では、カンマを軽く流してしまうと、骨格と補足の区別が曖昧になり、主節の見通しが悪くなります。もちろん、カンマの後ろが常に同じ種類の要素とは限りません。しかし、構造上「一つのまとまり

が終わった」合図であることは非常に多いです。したがって、まずはカンマの前で切り、その後ろが何の補足なのか、何を並べているのかを落ち着いて判断してください。カンマは、意味の切れ目である以上に、構造の切れ目を示す重要な記号です。

掟 3-13　カンマで挟まれたら、ダブルスラッシュで囲め。そこは挿入である。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

英文では、カンマで挟まれた部分は、挿入・補足・言い換えとして置かれていることが非常に多いです。したがって、スラッシュリーディングでは、その部分を普通のスラッシュではなく、ダブルスラッシュで囲んで「挿入である」と明示すると、構造が非常に見やすくなります。とくに多いのは、名詞要素（同格）・副詞要素・主節の挿入の三つです。たとえば Kyoto, // the old capital of Japan, // is famous for its temples. では、the old capital of Japan が Kyoto の同格です。This book, // in my opinion, // is very useful. では、in my opinion が副詞要素の挿入です。また、The plan, // I think, // will succeed. では、I think が主節の挿入になっています。このような部分は、いったん外しても主節の骨格が成り立つことが多いので、骨格とは分けて読む必要があります。英文解釈では、これらを主節の一部と混同すると、主語・動詞・補語の対応が見えにくくなります。したがって、カンマで挟まれた部分を見たら、まずダブルスラッシュで囲い、「これは同格か、副詞要素か、主節の挿入か」を判断してください。こうすることで、骨格と補足の区別が一気に明確になります。

掟 3-14　コロン、セミコロンを見たら、その前で切れ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★★　重要度：A★★★★★

コロン（:）やセミコロン（;）は、スラッシュを入れるときの強い区切れ目です。どちらも、前のまとまりがいったん完結し、そのあとに新しい内容が続くことを示しますが、働きには違いがあります。コロンは、前の内容を受けて、その具体例・説明・換言・中身を示すことが多い記号です。たとえば He had only one wish: / to see his son again. では、コロンの後ろが one wish の具体的内容になっています。つまり、前と後ろの意味関係は「これから中身を示す」という方向です。

一方、セミコロンは、等位接続詞に近い働きをし、前後の文のつながりが強いことを示します。たとえば He was tired; / he kept working. では、二つの節はほぼ独立していますが、内容的には強く結びついています。and, but, so などを明示せずに、強い連結だけを示していると考えると分かりやすいです。

したがって、コロンやセミコロンを見たら、その前で一区切り入れてください。そして、コロンなら「後ろは前の例示・換言・説明ではないか」、セミコロンなら「後ろは前と強く結びつく別の節ではないか」と考えることが大切です。これにより、文の論理展開がかなり見えやすくなります。

掟 3-15　ダッシュを見たら、その前で切れ。

妥当性：A★★★★★　頻出度：A★★★★☆　重要度：A★★★★★

ダッシュ（—）は、スラッシュを入れるときの強い区切れ目です。英文では、ダッシュの後ろに補足・言いかえ・強調・挿入が置かれることが多いからです。したがって、ダッシュを見たら、まずその前で一区切り入れることを基本にしてください。ここで大切なのは、ダッシュの前が完全文か不完全文かを確認することです。たとえば He had only one dream — a peaceful life in the countryside. のように、ダッシュの前が完全文で、後ろが名詞要素なら、その名詞要素は前の内容を言いかえる同格であることが多いです。つまり、後ろは新しい文ではなく、前の内容の説明・言いかえです。

一方、ダッシュの前がまだ不完全文なら、後ろは主節の続きを中断して入った挿入である可能性が高くなります。とくに、もう一つダッシュが後ろにある場合は、その二つのダッシュで囲まれた部分を挿入として読むのが基本です。たとえば The plan — if we can finish it by Friday — will save a great deal of time. では、if 以下は途中に入った挿入であり、主節の骨格は The plan will save ... です。したがって、ダッシュを見たら、その前で切り、前が完全文なら同格、不完全文なら挿入を疑ってください。ダッシュは、骨格と補足を見分けるうえで非常に有効な記号です。